

尾道市史編さん委員会事務局だより 2017.4

# 市史広報 \*創刊号\*

## CONTENTS

- 【巻頭】新尾道市史編さん始動
- 【特集】みつぎ発～再びめぐり逢う秘仏と伝説～
- 【トピックス】「尾道新聞」発掘、文化財調査等
- 【事務局発】常称寺の下張り文書確認／刊行計画



# 新尾道市史編さん始動



(行發堂京東)

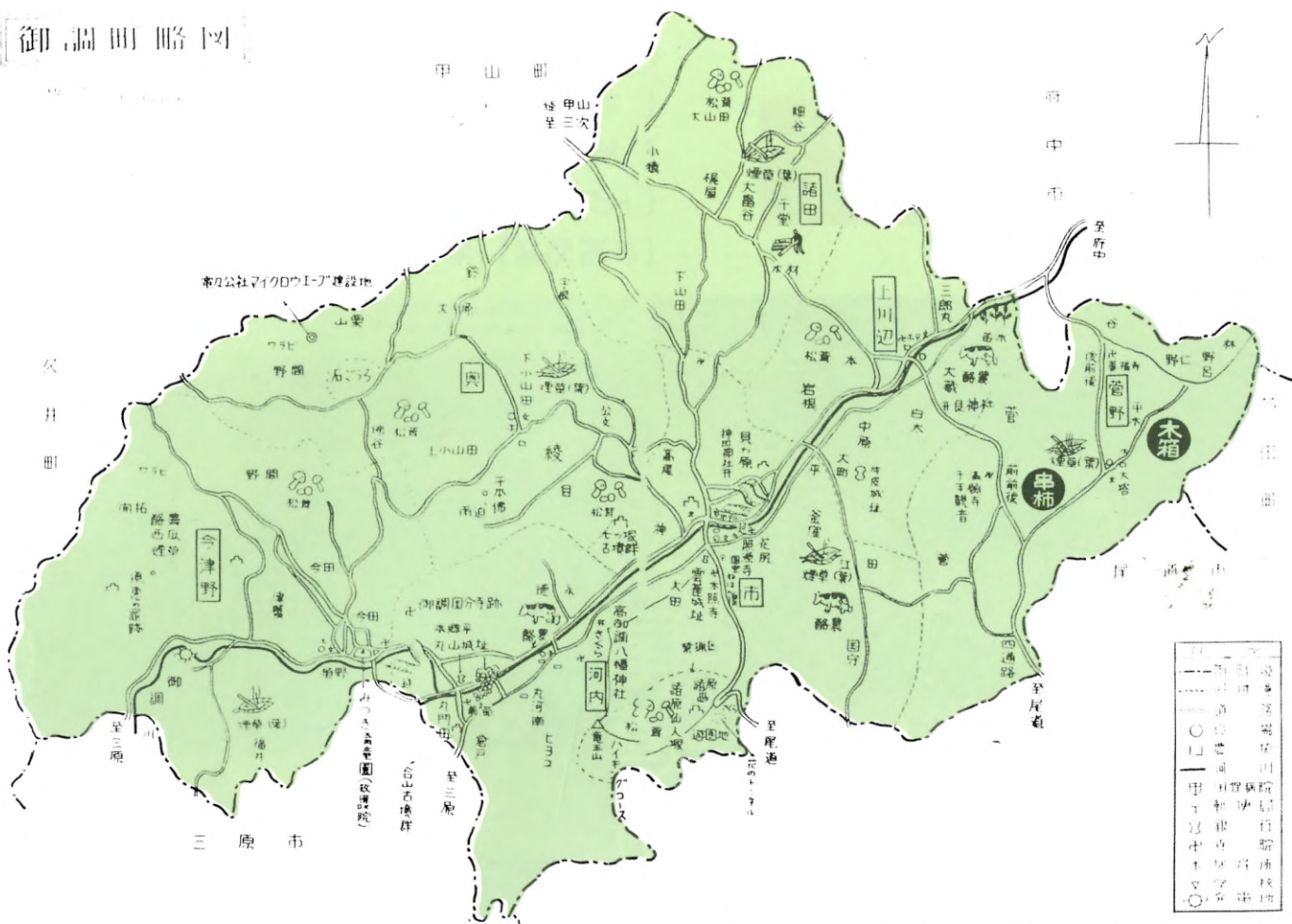
出退工職 場工島因 所工鐵阪大

View, of, CompleteView, at, Setoda (二其) 景全田戸瀬國藝安

### 旧尾道、御調、向島、因島、瀬戸田の新尾道市域を網羅した、新たな市史編さんが始まりました！

写真解説…【上段左】御調の串柿作り（昭和30年代・御調町閉町記念誌－歴史編より）【上段右】千光寺山から望む尾道市街（戦前・尾道学研究会所蔵写真絵葉書より）【中段左】向島入川の貯木場で遊ぶ子ども達（昭和40年頃・土本壽美氏撮影）【中段右】加島（向東沖）海水浴場での潮干狩り（向東中学校所蔵写真より）【下段左】因島大阪鉄工所（後の日立造船因島工場）の職員退出風景（戦前・尾道学研究会所蔵写真絵葉書より）【下段右】瀬戸田港風景（戦前・尾道学研究会所蔵写真絵葉書より・パノラマ写真のうち一枚）

# 御調略図



『伸びゆく御調』楠務編集発行（中国観光地誌社）1969 より



御調町の地勢基本データ…旧御調郡下では北部に位置し、東は福山・府中・西は久井、南は尾道・三原、北は世羅（甲山）と接する。総面積 82.98 平方km。北に標高 699mの宇根山脈、南に木頃山脈が控え、その支脈の山々が広がり、それら山林が町域の約 75%を占める。町内を西から東へ流れる御調川は芦田川支流になり、小支流を含め流域一帯が河成平地を形成している。エリアは菅野・上川辺・市・河内・今津野・綾目・大和の地区で構成される。

## 御調の歴史・文化ダイジェスト

御調郡の郡名を町名とした御調町は、昭和30年（1955）2月1日、七カ村（基本データ記載のエリア）が合併して誕生しました。

歴史の跡を遡ると、最古の痕跡では曾川1号遺跡（大町）において弥生時代の集落が認められ（竪穴式住居等を確認）、そこでは縄文後期から弥生時代にまたがったの土器や石器が出土しています。貝ヶ原遺跡（貝ヶ原）からは吉備地方に分布する祭祀用土器の「特殊器台」（県重要文化財）が発見されるなど、吉備や山陰地方との往来・交流も窺い知れます。

古墳を見ると、主に小規模な円墳が御調川沿いに点々と分布し、その数は90基近い数が確認されています。その御調川流域には古代の山陽道が通り、街道沿線には7世紀後半に古代寺院（本郷平麿寺）が建造されており、堂塔の礎石や蓮華文様の軒丸瓦が数多く発見されるなど、交通の要衝としての繁栄ぶりの一端を垣間見せています。

武士が台頭し、群雄割拠の中世の時代には、御調町内にも多くの山城が築かれ、主なものでは内海氏の牛の皮城（上川辺）、池上氏の雲雀城（市）、上里氏の丸山城（河内）などの城跡を遺します。

近世江戸時代では、石見銀山（島根県大田市）からの産出銀を輸送するルートとしての「銀山街道」が町内を通り、宇根の古道などは街道の面影を今に留めています。

近代以降は、市村と尾道を繋いだ幹線交通としての「オノテツ」こと尾道鉄道（大正14年～昭和39年間）の存在が大きく、現代（戦後）では「御調方式」と称された福祉医療の先進的な取組み、スポーツ振興ではソフトボールが盛んな町としても知られます。芸術文化では、文化勲章受章者である彫刻家・圓鏗勝三氏、伝統芸能では「みあがりおどり」（県無形民俗文化財）などが伝承されます。

平成17年（2005）3月28日、向島町と共に尾道市と合併し、緑豊かな里山の尾道を形成しています。

御調町菅野集落にある山寺・満願寺で、33年に一度の秘仏本尊の御開帳が、4月9日(日)の花まつり法要で行われました。33年ぶりにお姿を現した秘仏は十一面千手観音菩薩(市重要文化財)で、来歴によれば中国地方の覇者となった戦国武将・毛利元就とのゆかりを秘め、三度の移動を経て御調の里山に至りました。満願寺は旧称を「阿弥陀院」と称し、天台宗の寺院として安芸国の吉田村、現在の安芸高田市(旧・高田郡吉田町)に神龜元年(724)創建されたと伝えます。戦国時代の天正11年(1583)に、同地を本拠とする毛利元就によって毛利氏の祈願所となり、併せて天台宗から真言宗へ改宗したとされます。

天正末期の頃、毛利氏が吉田から菅野の地へ寺を移し、この時に海頭山満願寺へ寺号も改められたと寺伝にあります。



みつぎ発

## 再びめぐり逢う秘仏と伝説

その後、本尊は更に移動し、徳川時代の慶長9年(1604)には山口県の伝法山安養院(柳井市にある浄土宗建立寺の前身が安養院で、毛利家との関係がある事から該当するものとみられる)に移り、菅野の満願寺は廃寺になったようですが、寛永元年(1624)、山口に行ったはずの本尊が知らぬ間に菅野の地へ帰られて、今に至っているという不思議な伝説で寺伝は締めくくられています。

地元では「菅の観音さん」と親しまれるこの本尊は、別に「宙づり観音」という異名も持ちます。像の足の下に半紙を入れると蓮の台座との間をすり抜けることから、宙づりになった形で人々の苦しみを救うという信仰から名付けられたものです。

御開帳(17年目に半開帳)の折には「花踊り」という芸能が盛大に行われましたが、昭和27年を最後に廃絶しています。

昨年の大河ドラマ「真田丸」では、豊臣最後のヒーロー真田幸村の勇姿が描かれましたが、その息子(長男)である真田大助もまた後半戦で登場し、凛々しい若武者の姿を披露しました。

真田大助は父・幸村と共に大坂の陣に臨み、道明寺の戦いでは敵将の首を取る奮戦をしますが、手傷を負い、父の命で豊臣秀頼の傍に付き、秀頼自刃の際は脱出を勧められますが、秀頼に殉じ切腹して亡くなったとというのが今に伝わる史実となっています。

没年については13〜16歳の間で諸説ありますが、今の中高生辺りに相当する若者だったようです。

が、大助は実は生き延びていたという伝説が、御調の里山に語り継がれてきました。それが徳永集落に伝承される「真田大助ゆかりの石碑」であり、他にも関連するスポットを見ることが出来ます。



みつぎ発

## 再びめぐり逢う秘仏と伝説

伝説は秀頼・幸村ら一行の鹿兒島落ち延び伝説に対応するもののように、秀頼再興を徳川家康に歎願すべく、鹿兒島から江戸へ向けて旅する大助が糸崎辺りから上陸し、徳永界隈へ至りましたが、ここで病に臥して亡くなります。その直前に、秀頼生存を示す証拠の品(遺品とも)を徳永の山中に埋めたといひ、その場所が長江谷山の山頂辺りに位置する石碑であると伝え、そうした曰くから、里人は畏れ多いものとして、碑に触れることも、掘り返すこともタブーとして扱っていた。その昔には「掘らないでください」と警告する立て札も傍に立っていたそうです。

徳永集落には真田姓が数軒にわたって分布し、その内からは幸村の名が見える家系図や江戸期の古文書、金箔片残る槍や刀、大量の古銭束が発見されるなど、伝説世界が鮮やかに甦りつつあります。



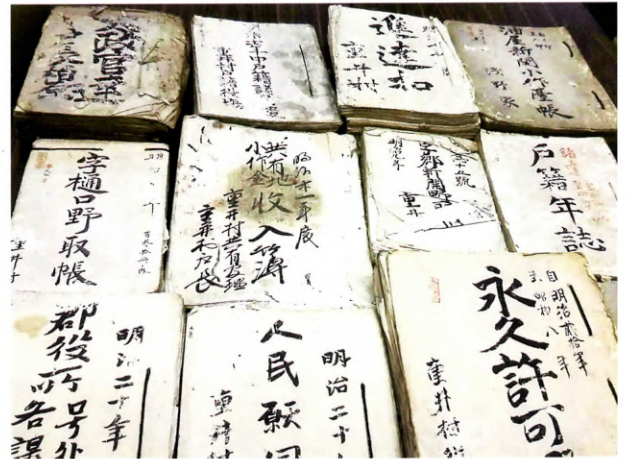
満願寺データ…【所在地】御調町大字菅長迫576番地、県道府中尾道線四通路から北西の山頂に所在【山号】海頭山【通称】菅観音【宗派】真言宗【創建】天正末期と伝【建造物】本堂、庫裏、鐘楼【本尊】木造十一面千手観音菩薩立像(像高120.5cm、市重要文化財)【異名】宙づり観音



真田伝説を共有する徳永の天満神社本殿に掛けられた奉納絵馬。騎馬武者に向かって、槍で応戦する若武者の勇姿を描く。奉納者の連名には真田氏の名前が二氏見える…【所在地】御調町大字徳永669番地【創建】戦国末期【建造物】本殿(文政2(1819)年再建)、拝殿、鳥居一基【祭神】菅原道真公、天太玉神(アマノフタマノカミ)、八意思兼神(ヤゴコロオモイカネノカミ)【例祭日】7月24日【社伝】信州上田城主真田氏の一族・真田七右衛門が大坂城の落城後、徳永村に來たりて農民となり、当社を創建するという…



【市史編さん地域協力員発】  
明治期に遡る地元紙「尾道新聞」の発掘・資料提供  
(三成地区の協力員・三訪会事務局の皆さんより)



【事務局発】  
旧市町に遺された行政文書群の整理と目録作成  
(写真は因島・重井村役場文書群の一部)



【事務局発】  
正念寺天井画の特別公開及び解説鑑賞会を開催  
(尾道学研究会・文化振興課との共催で実施)



【民俗部会・文化財部会発】  
寺院別の悉皆調査で史資料と未指定の寺宝を確認  
(写真は御調町下山田の北之坊満福寺での仏画調査)



【文化財部会発】  
指定文化財の仏像を調査及び写真撮影  
(写真は西久保町の常称寺にて)



【文化財部会発】  
天然記念物の再調査  
(写真は御調町福井のシダレザクラにて)

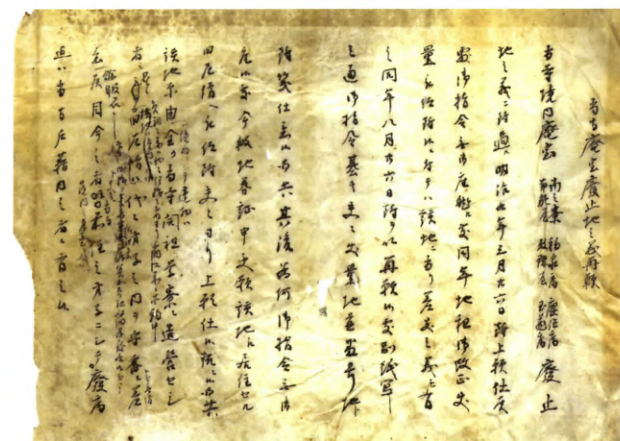
## 常称寺の下張り文書を確認

西久保町・時宗常称寺の庫裏（住職の住居スペース）の襖の一部から、下張りに使われた古文書紙片が大量に見つかりました。ダンボール2箱分になる下張りを事務局へ持帰り、慎重且つ丁寧に剥がす作業を行った後（写真右）、古文書担当者が文書の内容を確認し、史料となり得るか否かを選別しました。



下張り文書は手紙や証書類で占められ、ピックアップされた文書の中には、明治9年（1876）に常称寺大門周辺に存在した尼寺群の廃止を記録した文書も見られました（写真左）。それによると、この時廃止された尼寺は、「南之寮、福泉庵、慶徳庵、布施屋、珠数屋、玉蔵庵」で、何れも江戸後期に書かれた地誌『尾道志稿』にその名が見えています（珠数屋は志稿では数珠屋）。

廃止されて以後の尼寺に住した尼僧達は「当寺（常称寺）の守番として差し置く」とあり、本寺である常称寺の内に身を寄せた事が分かります。



## 『新尾道市史』刊行計画

市制施行120周年にあたる平成30年度を振出しに、40年度までの11年計画で、新市域を網羅しての『新尾道市史』を編さんします。全11巻の刊行スケジュールは次の通りです。

平成30（2018）年度	文化財編	上巻
平成32（2020）年度	文化財編	下巻
平成33（2021）年度	史料編	近代・現代
平成34（2022）年度	史料編	古代・中世
平成35（2023）年度	民俗編	
平成36（2024）年度	地理編	
平成37（2025）年度	通史編	原始・古代・中世
平成38（2026）年度	通史編	近世
平成39（2027）年度	通史編	近代
平成40（2028）年度	通史編	現代

### WANTED

#### 史資料や情報をお寄せください

古文書や古写真（写真絵葉書を含む）、古地図、尾道的话题を報じる古新聞など、市史編さん委員会事務局では、幅広い分野において尾道に関わる史資料を収集しています。また、無形の伝承（地域に伝わる言い伝えや独特な慣習、祭礼芸能等）についても収集対象となります。もし皆さんの自宅や周辺で、あるいは地域で、そうしたものが発見される場合は、事務局へご一報下さい。史資料については複製（写真撮影・コピー）を取らせていただくのみで、現物については速やかにお返しさせていただきます。情報提供は下記の事務局連絡先までお願いします。お電話での受付時間は平日 9：00～16：00（以降は文化財係：0848-20-7425 へお願い致します）

#### 編集後記\*2017. 5. 26

こんにちは！市史編さん委員会事務局です。  
新しい尾道市史の編さん事業が、平成28年度より始まりました。前回の創刊準備号に続き、今回は創刊号という事で、本格的に稼働し始めた市史編さん委事務局の活動の一端をお伝えしました。市史編さん委事務局発足以来、市内外の専門家の方々のご協力を得ながら、様々な史資料の調査が進んでおります。  
この市史だより『市史広報』では、市民の皆さんに最新の活動・研究成果を分かりやすく紹介するとともに、皆さんからの史資料の情報提供などをお願いする為、年に2回程度の刊行を予定しております。皆さんに身近に感じていただけるような市史だよりを目指して参りますので、暖かいご支援とご協力をお願い致します。（S.S記）